

槐 かい

岡井省二創刊

平成16年2月号

平成十六年二月一日発行 第十四卷第一号 通巻第一五二号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日発行 創刊復讐認可



酒饅頭

高橋将夫

新雪の野にゐて本来無一物

銀狐目から鼻へと抜けてをる

葱鮪鍋葱が残つてをりにけり

神迎かごめかごめの輪が止まる

チゴイネルワイゼン冬の泉かな
七五三さんさん五五に集まりし
地獄谷酒饅頭の蒸し上がる
酒饅頭の湯気の向こうもこの世かな
冬霧の流るる音に発光す
方円の器にたまる冬の水
鳩どりに夢の一字の戻りたる

眩しくもあり

柴田靖子

夕闇の明るきところ石露の花
海静かほつと安堵の花八手
辛きこと少なく生きて室の花
鶴来るむかしの語り大らかに
翳る日も明るき日もあり寒牡丹
かいつぶり沈みて空の茜色
定宿と決めておりたる都鳥
冬耕や日向と日陰田の中に
凍晴や躓きし石しつかりと
冬ざれや葺に並びし観世音

特別作品

行く人の足とどめをり冬桜
寺町の木洩れ日にして藪柑子
こぼれたる花柎に足を止む
大いなる山懐も冬の色
いつしかに雲たれこめて山眠る
怖いものいま何もなし冬鴉
浮寝鳥流れのままにゆれてをり
千両や太き節の手さし出され
ひつそりと眩しくもあり歸り花
瓢々と雲吹き行きて年暮るる

槐安集

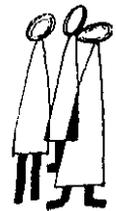
市場基巳

鳴の田の暮れてしまひて月あかり
姥月の峠に風の音の渦
池冷えにくはへ山冷え月明り
月のある渚へやをら立ちあがり
日は山に逃げて刈田の水白し

水野恒彦

貝塚を越さねば萱の覚えて来ず
わたつみに向く石柱や黄落す
玉珧を噛みそれからの海の音
山姫にうすぎぬを負ふ夜となれり
紅葉山一切経を蔵しをり

石脇みはる



イーゼルに裸婦像のあり日短か
冬の雁釘をつけてをりにけり
凍つる日の腕ゆるりと太極拳
寒靄あひの満濃池となりぬたり
枯野原何か探してぬたりけり

竹内悦子

神留守の朱印大日如来かな
渋柿や背中のぼしてをりにける
うず潮のやうにかきまぜ葛湯かな
蓮の骨見てをり烏笑ひける
顔見世や折ぎに鮪の大目玉

木下野生

大島のこちらに小島冬日和
友達のおほかた揃ひ冬日和
鶏と番ふにはとり冬日和
しばらくは喪服の通り冬日和
市役所のうらに小鳥屋冬日和

中島陽華

眼窩くぼみをり白鳥飛び来たる
郎女や松露触られぬたりける
ひよんの笛鳴り出してをり虎の巻
テトラポットのほんだはら喉佛
風花は極楽鳥のこだまかな

延広禎一

樂の字の百ある軸や山眠る
玉砂利に踏みごたへある祭足袋
つれづれや髯なき冬の御器かぶり
あれはなに問ふ子に答ふ狐畏
松茸の群れて法界無縁かな

栗栖恵通子

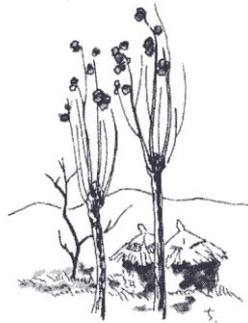
天地のあはひの熟柿いらふかな
河馬の齒のまばらに冬の立ちにけり
漢ひとり狐火の円陣に
耳立つて口が動いて十二月
日輪や雁一羽遅れをり

加藤みき

裏白にあつまつてをる鳥のこゑ
冬蝶の身じろぎ土に伝はりて
藪こぎの先の日の中冬苳
まつ青な水金色の枯蘆よ
シリウスや讃岐にこゑと面影と

大島翠木

石路の花湖の夕映えすぐに消ゆ
五鈷杵や白菜日々に締めゆく
雁の列並んでゐたる蛇籠の目
仏龕に散りゆく桜もみじかな
二粒の真珠を耳に冬至粥



槐市集

秋岡朝子

噓して飛びこえられぬ川があり
秋の虹傘が一本残りたる
小春日や着物姿を見せにくる
橙のほんのりと黄に村まつり
山茶花や海どこまでも真つ平

天野きく江

朝の湯の溢れてをりし新松子
岬回にひたと寄りくる石路の花
血の巡る腕にて抱く枯尾花
氷美味き地上を脱兎の鮪かな
虎河豚は汽水を越へず戻りけり

雨村敏子

畑のもの燃やす畑や鳥渡る
立冬の赤き馬穴に砂入れて
石路の花真向ひにあり水流る
新小豆水を潜りしひかりかな
神迎貝塚の上にと住みて

岩月優美子

きざはしの急勾配や朴落葉
蕎麦刈に風の匂ひと日の匂ひ
小春日の金剛仏に埃かな
白鳥や川の交はる辺りなり
花八手奥より能の響きかな



槐集

高橋将夫選

みどり児の息やはらかし蒲団干す

枚方

雨村 敏子

次郎柿や父ゆつくりと腰おろす

金剛の石の音なり鳥渡る

岡崎

本多 俊子

立冬の風とほりけり馬の首

師の作務衣石踏の花さくあたりかな

望の夜の弥山に潮のさして来し

冬銀河何も持たずに立ちてをり

寒蘭の闇より出でて牛の貌

大いなる小春の海にいだかれて

白臬今宵も同じ木を握り

安城

天野きく江

人間の灰汁吐き出さむ花八手

蒟蒻の裏も表も年つまる

枚方

谷村 幸子

さねかずら苦屋一戸を覆いをり

法堂の開け放たれて紅葉晴

小春日や魚卵の眼動き初む

双龍図十一月の空澄めり

暮れ泥む大灘割つて鯨来る

立冬の抽斗匂ひ袋かな

冬鴟のことん晴れて不安なり

香川

黒田 咲子

おひねりのとび交ふ讃岐かれを花

紅葉晴さしみ蒟蒻ぶらさげて

近藤きくえ

刀豆や滅法冷ゆる結願寺

山眠る魚板に大き穴のあり

神の木木よりそひ落葉いたすなり

巨木の根掘られてありし空也の忌

馳出るテニスコートの灯の消えて

朝しぐれ蛤御門に入りにつけり

八の字の翁眉なり寒鱒鱒

銀河往來 高橋将夫

— 善は急いで廻れ? —

一昨年の「槐」全国大会（第十一回）で、ハイポニカのトマトから物事の二面性、両極性、重層性について語ったが、今回は「ことわざ」から、そのあたりの機微にふれてみてみよう。

・「善は急げ」というが、「急がば廻れ」ともいう。
・「早起きは三文の得」というが、「果報は寝て待て」もある。
・「虎穴に入らずんば虎子を得ず」には「君子危うきに近寄らず」というのがある。

・三度目の正直」というが、「二度あることは三度ある」。
・「災い転じて福となす」と思ったら「泣きつ面に蜂」だったりして、「七転び八起き」が「七転八倒」になったりもする。
・「鶯が鷹を産む」と言つて、子や孫に期待もするが、おおかたは、「蛙の子は蛙」（瓜の蔓に茄子はならぬ）。

—— 挙げればきりが無い。世の中はことほどさように単純でない。しかし、これら一切は一に歸し、一から一切が生じることになるのだが、このあたりになると、がぜん話は難解になる。

俳句もまた然り。客観・主観、伝統・前衛…等、どちらか一方で満足できるほど単純ではない。「様式的美」というのがある。しかし俳句はそうでなからう。だから俳句はむずかしくて、面白。

それにつけても、「捨てる神あれば、拾う神あり」。最終的にはどこかで辻褄が合っているのだろう。

望の夜の弥山に潮のさして来し 雨村 敏子
なんともめでたいの一語。句の姿がよい。調べがよい。精神の位相がよい。

小春日や魚卵の眼動き初む 天野きく江
魚の卵の中の黒点が動き出したという。小春日の中で演じられる生命の神秘。不思議の世界。

神の木木よりそひ落葉いたすなり 黒田 咲子
神木が落葉している景。神木でなくとも、木々に霊が宿るのがアニミズム。それにしても「よりそひ落葉いたす」はなんとも意味深長。

蒟蒻の裏も表も年つまる 本多 俊子
槐集の一句目が〈金剛の石の音なり鳥渡る〉で、五句目が掲句である。金剛と蒟蒻であるところが、まさに俳諧。俳句は一句独立であるが、五句そろつと、それ自体がまた一つの小宇宙。

双龍 閏十一月の空澄めり 谷村 幸子
絡み合う二匹の龍が圧倒的な迫力で迫ってくる。その龍が今にも澄んだ空に舞い上がりそう。立派な立句。

琴坂の冬の小蟹のすばやくて 近藤きくえ
冬の生き物はなんとなく哀れを感じさせる。ところが、この小蟹はいたって元気そのもの。琴坂がまためでたい。

(以下略)